

## 牛ロスから考えること

静岡県立藤枝北高等学校 2年 半田 花楓

しんとしたアスファルト。今、工場の駐車場になっているその場所は、1年前まで多くの牛たちが暮らす牛舎でした。

我が家は、約50頭の乳牛を飼育している酪農家でした。私も幼いころから牛の世話を手伝い、近所の人からは「牛の家の子」と覚えられていました。搾りたての牛乳を飲む生活が、これからもずっと続いていくものだと思っていました。

中学3年生の夏、家族で食卓を囲んだ時に、祖母から突然「牛やめるからね。」と言われ、私は言葉を失いました。「どうして?」「やめないで」と思う私をよそに、祖母は「大変になる前にやめられてよかった。」とつぶやいたのをハッキリと覚えています。

その年の冬、我が家は酪農を廃業。家族は初めて静まりかえった正月を過ごし、私は進路について悩みました。翌春、私は農業の選択科目がある藤枝北高校へ進学をしました。

農業に携わることを諦めたくなかったからです。

入学後、スイカや大根の栽培をしたり、SDGsについても学び、農業全体への興味関心が高まりました。授業の中で、農業問題に関するレポートをまとめる課題が出され、その中のテーマの1つが「酪農の経営について」でした。酪農をなぜやめたのか。何が大変だったのか。今だったら祖母に真意が聞けると思い、私は質問をしました。

祖母は、第一に飼育コストが上昇していることを挙げました。酪農家は牛に栄養豊富な餌を食べさせて、上質な脂をつけさせたり、たくさん牛乳を搾ります。そのため、トウモロコシや大麦、大豆かすなどを混ぜた配合飼料を与えます。こういった穀物は主に海外から輸入していますが、その価格はこの2年で1.5倍にも上がっています。天候不順やロシアによるウクライナ侵攻、歴史的な円安など要因は様々ですが、じわじわと経営を圧迫していきました。

また、電気代の高騰も厳しいものでした。防暑、防寒対策などはもちろん、搾乳機や、搾った牛乳を貯蔵するタンクも、ずっと稼働しています。こうした毎日絶対に欠かせないもののコスト上昇により将来性が危ういと感じ、早めに廃業を決意したようです。

事実、赤字経営をしている酪農家は多く、経営環境の改善の目処がつかず離農を検討する人が増えています。

次に挙げたのが、365日休みがないことです。生き物を相手にしているので、毎日餌を与えて排せつの処理をし、病気にかからないよう体調を管理します。牛は毎日乳を搾らないと、炎症を起こしてしまう可能性があります。そのため、冠婚葬祭の時でも、帰宅してから深夜まで搾乳をしたそうです。機械を導入するにもお金がかかりますし、人の負担を減らすことは簡単ではありません。ヘルパー制度が導入され、人の手を借りることもできるようになりましたが、人件費が高く頻繁に利用できないと言っていました。

これらの話を聞いて、酪農の経営は、生き物を育てるという肉体労働、日々かかるコストのシビアさ、人手不足など深刻な問題を多く抱えていることが明らかになりました。私の両親は酪農を継がなかったのに、高齢になった祖父母が今後も続けていくのは限界だったのです。

今の酪農家は、やるも地獄、やめるも地獄。一番つらい思いをしていたのは祖父母だったのだと、ようやくわかりました。

このような現状を打開できないか。同じように悩んでいる酪農家の力になれないか。小さなことでも私に出来ることをやってみようと考えたのが、SNSでの発信です。

一時期、コロナウイルスの影響で牛乳の需要が低下し、牛乳が余ってしまうということが起こりました。そんなとき、インフルエンサーが牛乳を使った様々なレシピをSNSに投稿しました。フォロワーに牛乳の消費を促しているのを見て、何だか嬉しかったのを覚えています。

普段酪農と関わりがない人でも、SNSだったら伝えられるかもしれない。私は、どのようなSNSが注目されるのか調べてみました。

雪印メグミルクでは、8月からの牛乳の値上げに対応する形で、牛乳かき氷のレシピを配信したり、夏休みの自由研究でミルクを題材としたサイトを公開していました。また、サブスクリプションサービスも人気を集めています。お得な値段で定期的に牛乳が送られてくるので、消費拡大や安定した供給をすることができます。

牛乳の値上げなどによる需要低下を抑え、適正な価格で手に取ってもらえることが増えれば、少しでも酪農の応援になる。私はそう信じ、牛乳を使って様々な料理を作ったり、レシピなどをSNSで発信、共有しています。

私は現在、高校で食品科学系列を選択し、食品について学んでいます。栄養素について勉強したり調理の実習をする中で、今まで口にしてきたものでも、知らないことが沢山あることに気づきました。私の今の夢は、酪農と食品の知識を生かし、乳製品の消費拡大、酪農の素晴らしさ、厳しい現状を発信して、色んな人に届けられるような料理人になることです。

私は、スーパーでパックに入った冷たい牛乳を買うことが日常になりました。

もう我が家の搾りたての温かい牛乳を飲むことができないと思うと時々悲しくなります。

しかし、このパックの牛乳には、沢山の酪農家さんの苦勞と愛情が詰まっている事を、私は知っています。

私たちの生活に欠かせない乳製品を安定的に供給できる体制づくりと、その利用拡大のため、私はこれからも「牛の家の子」として未来を切り開いていきます。